

新たな管理と排除のシステム 学校をおおう

巻頭の
ことば

1990年代アメリカで学校の治安維持を目的に開発された「ゼロ・トレランス」という新たな管理と排除のシステムが日本の学校現場に浸透しつつある。それは、2006年、国立教育政策研究所の「生徒指導体制の在り方についての調査研究」報告書で紹介され、文科省が新たな生徒指導プログラムとして学校現場への導入を推奨するなかで全国的に広がった。

「ゼロ・トレランス」とは、子どもの問題行動を基準化し、「違反」には減点方式などで厳格に運用して罰を課すというものである。従来の管理主義との違いは、その運用のマニユアル化にあり、学校は、「問題生徒」を排除する徹底した厳罰主義の立場から生徒の問題行動への対処マニユアルを作成し、それに基づいた指導の徹底をはかる。生徒指導のマニユアル化は、とりわけ若い教師に自らの実践の未熟さを補うものとして歓迎されているという。また、保護者・地域に対するアカウンタビリティーに心えるものとしても機能する。

教師の多忙化に加え、ベテラン教師の大量退職と若手教師の大量採用は、教師集団に豊かに蓄積された経験の伝承を困難にしている。そこにマニユアルに基づく事務処理的管理手法が入り込んでいく。それは教師の反省的経験を奪い、思考しない教師を作り出していく。いまや学校の教職員組織は、ピラミッド型の職階構造に改編され、職員会議も上意下達の連絡調整機関と化した。そこにおいて「ゼロ・トレランス」は、新たな教員の管理統制のシステムとして機能する。学校から子どもへの理解や指導の在り方をめぐる議論の場を消し去るとともに、教師から自由な実践の機会を奪ってしまうのである。

そして「ゼロ・トレランス」がアメリカの犯罪対策の手法に端を発するものであることも見逃してはならない。「ゼロ・トレランス」な学校像の向こうには、「ゼロ・トレランス国家」、すなわち新たな統治システムによって異質な存在を排除し個人の自由を制限する安倍流「美しい国」の姿が垣間見える。